

♡ 彼と私の一週間 ♡



♡ 愛本ゆうり ♡

日曜日→月曜日

「あ、朱里ー？」

母さんがひじきを口に運びながらちらとカレンダーに目をやって、今思い出したとでもいうかのように暢気な声を出した。小首を傾げて母さんの言葉の続きを待っていると、母さんにはっこり笑いながらこちらを振り返る。

「お母さん明日からお隣の東堂さんと一週間温泉旅行に行ってくるから、家のこと、よろしくね」

「……は」

私の箸からぼろりと里芋が落ちた。

月曜日

ピンポンと何度インターホンを鳴らしても、誰かが出てくる気配は一向にない。どうやら家のなかには誰もいないようだ。まだ学校から帰っていないのかもしれない。いつもなら私のほうが帰りは遅いのに、今日に限ってなんで私のほうが帰りが早いのだろう。私は小さくため息をついて、自分がしつこくインターホンを鳴らし続けたお隣の家を見上げた。こじんまりとした灰色の二階建ての家の屋根に、鳩が一羽止まっているのが見えた。することもないのでその鳩をじっと見つめてみる。鳩は忙しなく身体の向きを変えながら屋根の上で何かをしていたが、やがて私の視線に耐えかねたとでもいうかのように飛び立っていった。それを目で追う。

「……何してんの」

呆れたような声が出た。はっとして声が出た方向を振り返る。そこには、一人の少年が立っていた。腰に片手をあてて、もう片方の手にはコンビニの袋を提げて、半眼で、人を見下したような態度でこっちを見ている。すっかり見慣れた彼の姿を認めると、私の顔にはぱっと笑顔が浮かぶ。たとえ相手にどんなに馬鹿にされていようと、関係ない。

「晃くんっ！ 待ってたよ！」

晃くんは一瞬私の顔をじっと見つめたのち、私の横を素通りして自分の家の垣根をくぐった。……待て待て。無視するな。

慌てて彼の黒いTシャツの裾をつかむ。くいと引っ張られ、晃くんは不機嫌そうにこっちを振り向く。私はそんな彼の態度にもめげることなく笑みを保つ。

「今日から一週間、お母さんたち旅行に行っちゃったでしょう？」

「……知ってる」

それが何だともいうように晃くんは怪訝そうな表情を浮かべた。

「私、お母さんに、晃くんに晩御飯でも作ってあげたら、って言われてるんだよね」

そう言うと晃くんの目が少し見開かれた。

「朱里、料理できんの」

「い、一応はできますよっ！ ……簡単なのしか作れないけど」

ふーんと晃くんは興味なさそうに言って、じゃ晩飯できたら呼んで、と家に入ろうとする。幼馴染に対してなんともそっけない態度である。昔はこんな子じゃなかったのに、と少し切ない。

「ちょっと待ってよ晃くん」

再度彼が家に入ってしまうのを止めると、彼はしぶしぶながらも振りかえってくれた。

「何」

「あ、あのですね、」

今の今まで言うつもりだったのに、こういざ言うときになるとなんとも言いだしにくい。相手が不機嫌そうならなおさらだ。いくらこの子が幼馴染で、実の弟のような存在だとしても、この提案はちょっとあれかなと思ったりもする。しかし言わないわけにはいかない。怖がりな私だ。一週間も一人で過ごすなんて耐えられない。だから私は意を決して口を開いた。

「晩御飯作ったげるから……ついでに、ついでにだよ？ この一週間、家で暮らさない？」

最後は尻すぼみになってしまった。思わず少し俯いてしまう。が、こう弱気な態度では駄目だと自分を戒めて相手をまっすぐ見やる。晃くんは、暫く無言でじっと私を見つめていた。表情のよく読み取れない顔をしていた。と、思っ

たら、ふいににやりと口の端にいじわるそうな笑みを浮かべた。

「朱里、一人が怖いんでしょ」

「！こ、怖くなんか、」

「じゃあ別に僕が行かなくてもいいでしょ」

「う……」

「大体、寝る部屋はどうするのさ」

「お兄ちゃんの部屋を使えばいいよ」

現在私のお兄ちゃんは東京大学に合格したため、上京してひとり暮らしをしている。だからお兄ちゃんの部屋が丁度空いているのだ。お父さんも単身赴任で家にはいないし、お母さんが旅行ででかけてしまったら一人きりになってしまう。はっきり言って、家に一人でいるのはとてつもなく寂しい。高校三年生にもなって、だ。自分でも恥ずかしいことを頼んでいるとは分かっている。でも、相手が気を許した幼馴染だから、実の弟のように思っている晃くんだから、頼むのだ。それに晃くんのお父さんも単身赴任中で家にはいないし。お互い一人になってしまうなら、どうせなら一緒に暮らしたっていいではないか。私は両手をあわせて頼みこむような仕草をした。

「ねえお願い！宿題手伝ってあげるからさ、ね？」

晃くん。晃くん相手に効果はないだろうとは思いながらも、若干上目遣いになって名前を呼んでみる。晃くんの眉間にかすかに皺が寄るのを見て、ああ、やっぱり私じゃ可愛いどころか逆に気持ち悪いか、なんて少し悲しい気持ちになる。しかし私はめげない。こっちは必死なのだ。一週間平穏な生活を送れるかどうかがかかっているのだから、恥なんか捨ててやる。そう思って暫く晃くんとにらみ合っていると、やがて晃くんが大きなため息をついた。

「……分かったよ」

さも仕方ないというような口調だが、それでも私は嬉しかった。途端にぱっと笑顔が浮かぶ。

「ほんと!?! やったー！ありがとう晃くん！」

「ちょ、抱きつかないでよ」

嬉しさのあまり抱きつこうとする私を心底嫌そうに押しのけ、晃くんはズボンのポケットから家の鍵を取り出した。そしてがちゃりと鍵を開けて、ドアを開く。

少し不安になって彼の後ろ姿を見ていると、私の視線に気づいたらしい晃くんが振り返って、
「なにそんな顔してんの。ちゃんと行くから。着替えとか用意するだけじゃん」

と言ってくれたので、安心して私は先に家に入っていることにした。

学校帰りに軽く買い物を済ませてから隣の家に晃くんを呼びに行くと、晃くんはすぐに出てきてくれた。慣れた様子で私の家に上がりこむと、真っ先に現在主のいないお兄ちゃんの部屋に向かう。床に座り込んで持ってきたノートパソコンを開いて、ヘッドフォンを装着して、起動するまでのわずかな時間にルービックキューブをいじる。

不揃いだった面が、数秒後には綺麗に全ての面の色が揃っている。いつ見ても鮮やかな手さばきだ。

私は晃くんの隣に座り込んで、彼の手のなかで色鮮やかに転がるルービックキューブをぼんやりと眺めたり、時々晃くんの横顔に視線を向けたり、パソコンの画面を見つめたりする。

暫くすると、晃くんはルービックキューブを置いてキーボードの上に指を走らせた。

カタカタと軽やかに走る褐色の細い指。画面には、私にはさっぱり分からない文字や記号の列がずらりと並んでいる。

。

画面をじっと見つめても、何も分からなければつまらない。なので私は仕方なしに自分の携帯をいじることにした。

構ってくれないかな、なんて微かな期待を込めて時折ちらちらと晃くんに視線を投げかけるけど、当の本人はパソコンに夢中で私のことなんかお構いなしだ。

……なんだか少し寂しい。口を尖らせて携帯でお気に入りのホームページをめぐるつもりで試してみたりするけれど、どのサイトも更新されていなくて、することがなかった。ため息をついて携帯を床に置く。パソコンの画面に視線を向けると、先ほどよりも訳の分からない文字や記号の列が増えていた。

晃くんは、パソコンやゲームに非常に詳しい。本当に小さい頃からパソコンをいじっていた記憶がある。中学二年生と彼はまだ幼いけれど、その天才的な頭脳を買われてなんとゲーム開発に携わっている。恐らく、今も仕事なのだろう。だから邪魔をしてはいけないのだ。分かっている。それでも構ってもらえないのは寂しいと思ってしまう。

「晃くん」

邪魔しちゃ悪いとは思いつつ、試しに名前を呼んでみた。反応を待つ。……無反応。ヘッドフォンで音楽を聴いているから、聴こえなかったのだろうか、それともわざと無視したのだろうか。後者だとお姉さんは非常に悲しい。

膝を三角にたてて、その膝に顔をうずめて拗ねてみる。自分でも子どもっぽいと分かっている。でも他にすることがない。

カタカタというキーボードを叩く音と、ヘッドフォンから漏れるシャカシャカという音だけが耳に入ってくる。他には何の音もしない。静かだ。目を閉じて何の音楽を聴いているのかな、なんてぼんやり考える。耳を澄ませてみるけれど、よく分からない。顔を膝の間にうずめたまま、ひとつ欠伸をした。……なんだか眠くなってきた。顔をあげて床に転がっていた青いクッションをひきよせ、それを枕にして床に横になる。晃くんは構ってくれないし、まだ夕飯を作るまで時間あるし、特にすることもなし、もういいや、ここで寝てしまおう。そう思って重い瞼を閉じると、私はあつという間に眠りの世界に誘いこまれていった。

ふと髪に何かの感触を感じた。

うっすら目を開けると、私の部屋じゃない、と思った。あれ、ここどこだっけ。あの壁にかかっている掛け時計、見覚えがあるな。……そうか、お兄ちゃんの部屋か。今何時……？ 八時、十七分。八時……。え。夜の？ ん……ちょっと待って。晩御飯作らなきゃ！

そこで私の頭は完全に覚醒した。ぱっと上半身を起す。すると、パソコンに向かっていた隣の晃くんがびくりと大きく身体を震わせたのが分かった。と同時に、ぱさりと何かが私の身体の上から落ちる。

何だろうと思って見ると、それは私が寝るときに使っているタオルケットだった。どうやら晃くんがかけてくれたらしい。こういうところは優しいんだから、と思わずにやけてしまう。晃くんのほうを見ると、ヘッドフォンを外して、気味悪いものを見るような顔をしてこっちを見ていた。

「……なににやけてんの、きも」

「えへへ、晃くんて優しいなあって思って」

ふいと視線をパソコンの画面に戻して、別に、と晃くんは小さく呟いた。長いつきあいだから私には分かる。これは

絶対照れている。そんな晃くんが可愛くて、ますますにやにやしてしまう。その時ふと、私のベッドの上にあったはずのタオルケットがここにあるということは、晃くんは私の部屋に入ったってことだよな、という考えが頭を掠めたが、それは今は考えないでおくことにした。

「こんな時間まで寝ちゃってごめんね。おなか空いたでしょ。今すぐなんか作ってくるよ」

起きてくれればよかったのと言いながら床に転がっていた携帯を拾ってぽこんと開くと、新着メールが一着来ていた。着信音に気づかなかった。それほど熟睡していたのか。一体誰からだろうと思って受信画面を開く。友だちからのメールか広告メールを予想していた私は、送信者の名前を見て、思わず固まってしまった。

それは、同じクラスの西田くんからのメールだった。西田くん。私の憧れのひと。ずっと気になっていて、でも遠い存在のひと。何度か会話を交わしたことはあるけれど、大抵事務連絡とかで個人的な会話はしたことはない。メールを開くこともせず、暫く携帯の小さな画面を見つめたまま静止する。西田くんのアドレスを一応知ってはいるが、彼とメールを交換したことなどこれまで一度もない。一体、なんのメールだろう。はっと我に返ってどきどきしながらメールを開く。短い文章が目に入った。

件名：無題

いきなりメールしてごめん。それから、これまたいきなりなんだけど、もし明日暇なら、放課後映画観にいかない？ 今話題の「宵の歌姫」。チケット丁度二枚あるんだけど、どうかな。返事、待ってます。

「きゃ————っ!!」

「わっ、な、何」

ぎょっとして身を引く晃くんの手をとって思わずぶんぶん振り回す。どうしよう。顔がにやけるのをおさえられない。晃くんはさっと手を引き抜いてこっちを迷惑そうに見ている。でもそんなことも気にならないくらい今の私は気が高ぶっている。もう一度携帯の画面を見て、夢ではないことを確認すると、晃くんに抱きつきたい衝動をこらえてぐっぐと携帯を握りしめた。

「聞いて聞いて！ 西田くんから明日映画に誘われちゃった！」

あ、返事！ 返さなきゃ！ と慌ててメールを打つ。三年生で部活も引退したし、明日は特に予定もないから映画に行ける。しかもずっと気になっていてまだ観に行けてない映画だ。西田くんと映画！ 夢のようだ。でも夢じゃない。私はうきうきして、了解のメールをぼちぼちと打った。

「西田って誰」

「んー？ 同じクラスの子」

「……行くの、映画」

送信ボタンを押して、私はこっくりと大きく頷いた。断る理由などない。

「あ、なるべく早く帰ってくるから！ 明日は丁度授業午前だけだったし、晩御飯作るし！ 六時までには帰ると思うから、心配しないでいいよっ」

ってもうこんな時間。急いで今日の晩御飯作るねと私は慌ててお兄ちゃんの部屋を出ていった。部屋を出るとき、後ろで晃くんが何か言ったような気がしたが、振り返ると晃くんはパソコンの画面に顔を寄せて眉間に皺を寄せていたので、気のせいかと肩を竦めて階下に降りていった。

放課後、ホームルームが終わると西田さんと高校の近くにあるショッピングモールに向かった。ここは映画館もあってうちの高校から近いので、うちの学校の生徒は結構利用している。

先生からは寄り道はいけないとは注意されているけれど、気に留めている者などだれもない。

たまにショッピングモール内を巡回している先生に見つかることはあるけれど、軽く注意されるだけで罰則とかはないから、寄り道する生徒は一向に減らない。先生も立場上注意しているだけで、本当は生徒が寄り道することを気にしてなんかいないのだと思う。

ショッピングモールのなかにあるイタリアンレストランで軽くお昼をとった後、書店で少し時間をつぶして三時からの映画を二人で観た。映画は最先端のCGを駆使した実写で、映像がすごく綺麗だった。アクションシーンなどはない静かな物語だが、映画に出てくる喋る狐がすごく可愛くて、ヒロインの女の子がすごく素敵で、最後にはほろりときた。私にしては珍しく、エンドロールも最後まで観た。映画館から出た後、映画の余韻に浸りながらグッズショップでパンフレットを買って、グッズを物色した。ほしいものは色々あったが、どれかひとつだけにしようと思ってじっくり見た。映画に出てきた狐のマスコットストラップが可愛くて、最終的にはそれをレジに持っていった。最初はストラップ一個とパンフレットを一部買うつもりだったのだけど、思いなおしてストラップをもうひとつ買った。

グッズショップで結構長居してしまったらしい。気づいたらもう六時前だった。早く帰らないと、晩御飯が作れなくなる。そう思って、今日は誘ってくれてありがとうと西田さんに伝えと、ちょっとモールのなかまわってみない、と誘われた。

もともと私は押しが弱い上に、相手は憧れの西田さんだ。こんな状況で西田さんの誘いを断れるはずもなく。晃くんのことが脳裏に過ぎたが、気づけば躊躇いがちに頷いていた。……ちょっとだけ、ちょっとだけ。ごめんね、晃くん。六時までに帰るのは無理だけど、なるべく早く帰るから。待っててねと心のなかで晃くんに謝ってから、西田さんの隣に並んで歩いた。

ちょっとだけのつもりだったのに、気づけばもう七時を過ぎていた。慌てた私は、西田さんにお礼を言って今日もう帰ると伝えた。夕食も一緒にどうかと誘われたが、残念だけれど流石にそれは断った。

二人とも電車通学なので、駅までは一緒に行った。しかし乗る電車は別方向だ。ホームに下りる階段の前で、私たちは別れた。

「じゃあ、また」

西田さんは微笑んで手を振ってくれた。

「またね。今日は本当にありがとう」

私も手を振り返しながら、またってどういうことなんだろうとぼんやり考えた。

タイミングがよかったらしい、乗るべき電車はすぐに来た。私が乗ると、ドアがすぐに閉まった。鞆から携帯を取り出して、片手で開く。電車のなかでは電話はできないので、メールで晃くんに連絡する。

件名：無題

遅くなってごめんね。すぐに帰ります。ご飯まだだよ？ 帰りになんか買って帰るつもりだけど、何食べたい？

「送信っと」

右手に携帯を握りしめたまま、ポールに背を預けて窓を眺めた。外はもう暗く、窓には自分が映っている。晃くんどうしてるかなあ。家でパソコンやってるのかな、それともルービックキューブでもいじってるのかも。そんなことを考えながら返信を待つ。

色を動かすのが好き。

昔、晃くんが言った言葉が思い出された。あの時は、そう、何でルービックキューブが好きなの、と聞いたんだ。その答えが、それだった。

色を動かすのが楽しいんだ。先を考えて、こう動かすとこの面がまず揃って、でも一旦揃えた面を崩して別の面を揃える。最初はぐちゃぐちゃでも、面が揃ったら、すっきりするだろ？ それも好き。

回想しながら、あの時はいまほどぶっくらぼうじゃなかったのになあ、なんて苦笑が浮かぶ。

そう、昔は可愛かった。

朱里ねえちゃんっていつでも私の後ろをとことこついてきて。結構泣き虫で。苛められていたところを発見して、助けたことも何度かある。暫く会えないとなると途端泣き出して。抱きしめたらぎゅって抱きついてきた。

昔はあんなに可愛かったのになあ。いつから今みたいにそっけなくなっちゃったんだろう。これが親離れてやつかなあ。お母さん、ちょっと寂しいよ。

遠い目をして窓の方を向いていると、窓越しに後ろに立つサラリーマンのおじさんとぼちりと目が合った。慌てて目を逸らす。……ちょっと恥ずかしい。

最寄り駅に着いても、駅近くのスーパーに着いても、晃くんからの返信はなかった。希望がないなら勝手に買っちゃうよ、と私は適当にお惣菜コーナーからおいしそうだと思うものを独断と偏見で選んでいく。二人分だからそんなにいらないだろう。

おからが食べたい気分だからおからも買っちゃえ。晃くんは確かおからが嫌いだったけれど、返信を返さなかった罰だ。好き嫌いすると大きくなれないぞとでも言ってやれ。身長の話は、本当は禁句なんだけれど、この際いいや。レジで会計を済ませて、スーパーを出る。すっかり暗くなってしまった空を見上げた。

家は駅からそんなに遠くない。歩いて七分くらいだ。家の前に着いて自分の家に入る前にまず晃くん家のインターホンを押した。

ピンポンと機械音が鳴る。待つ。……反応なし。

もう一度押す。待つ。……やっぱり反応なし。

三回目も反応がなかった。

晃くんの部屋の電気はついてるから、いることは間違いない。これは、居留守か？ それともヘッドフォンで音楽聴いていて気づいていないだけなのか？ いやでもメールしたから気づいているはずだよね。居留守の方が可能性が高い。

少しむっとしてインターホンを押しまくった。けたたましく鳴り響くインターホン。

自分でもしつこいと思うくらいに押し続けた。インターホンが壊れるんじゃないかってくらい押し続けた。同時に、晃くん、と近所迷惑も考えずに大きな声で呼ぶ。流石に名前を呼んだのは一回だけ。いくら私でも恥ずかしい。しかしインターホンは押し続ける。晃くんが何らかのリアクションを返してくれるまで、押し続けるつもりだった。

と、ガラッと勢いよく晃くんの部屋の窓が開いて、そこから不機嫌そうな顔が覗いた。ヘッドフォンを首にかけて、こちらを睨みつけている。しかし私は怯まない。ここは年長者の余裕をもってして、にこやかに対応しよう。笑みを浮かべてスーパーの袋を軽く持ち上げ、声をかけた。

「遅くなってごめんね。ご飯一緒に食べようよ」

晃くんは窓枠に肘をついて、手に顎を乗せて、私を尊大に見下ろした。

「もう食べた」

持ち上げていた袋を下ろし、晃くんを見上げる。

「何食べたの？」

「……カレー」

「どこで」

「……駅前の食堂」

「いくらだった？」

「……」

この質問に、晃くんは返答につまった。そこで私は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「はいはい、嘘つかないで。ご飯食べるから家においで」

「……、嘘じゃない」

「いいから降りておいで。遅くなったのは悪かったから。そんな拗ねないで」

「拗ねてない！」

「分かった分かった。じゃあ私待ってるから、降りておいでよー」

ぶつさ言う晃くんを放って、私は鍵を取り出して家に入った。

買ってきたお惣菜を二等分しながら待っていると、晃くんはノートパソコンとルービックキューブ、それに着替えを持って眉を顰めながらもちゃんと来た。何だかんだ言いつつ素直でよろしい。

席につかせてからおみやげを渡した。今日グッズショップで買った狐のストラップだ。晃くんは一瞬怪訝そうな顔をして私を見たが、無理矢理押し付けると渋々受け取ってくれた。私とお揃いー、と早速携帯につけた同じデザインのストラップを見せれば、

「何で朱里とお揃いのストラップ持たなきゃいけないの」とつれない。

「いいじゃん、幼馴染なんだし。携帯につけてよね！」

「はあ？ 何でそんなこと朱里に指図されなきゃいけないわけ」

げっ、おからじゃん、と予想通りの反応を示しながら晃くんはなんとも冷たい言葉を放つ。大丈夫。お姉さんはこんなことではへこたれない。

「いいからつけてよー」

「だから何で」

おからを遠ざけようとする晃くんに、好き嫌いしてると大きくなれないぞとからかいながら押し付ける。この禁句にむっときたらしい晃くんがおからを嫌々ながらも口に運ぶ。（扱いやすいなあ）可愛い晃くんで、ちょっと遊んでみ

たくなった。だから私は微笑んで言った。

「そうだなあ……。晃くんが好きだから！」

なんてね。と付け足すと同時に、おからを口に運んでいた晃くんが、むせた。

「だ、大丈夫？」

慌てて麦茶をごくごくと飲む晃くんに声をかける。暫くすると落ち着いたらしい晃くんが、なんとも感情の読み取れない表情をしてこちらを見た。

「……朱里ってさ、」

「何？」

首を傾げて言葉の続きを待つ。お互い無言で見つめあった。改めて見ると、晃くん、格好よくなったなあ。これじゃあさぞかし学校では女子にもてていることだろう、なんて思いながら見つめていると、ふいと晃くんが目を逸らした。

「……やっぱ何でもない」

「えー、何それー」

それ以上問い詰めても、晃くんは言いかけた言葉の続きを言ってはくれなかった。

ホームルームが終わって帰る準備をしていると、西田くんに声をかけられた。

「俺今日井上ん家に行くんだ。井上今日学校休んだら？ ちょっと心配でさ。だから、よかったら一緒に帰らない？」
もちろん憧れの西田くんの誘いを断るはずがない。突然の誘いにしどろもどろになりながらも、私は何とか首を縦に振った。

西田くんと仲のいい井上くんの家は家の近所だ。ということは乗る電車も一緒、電車を降りてからも途中まで一緒…
…うわあ、夢にまで見た展開だ。

あっという間に世界はばら色になった。

心のなかで雄たけびをあげて喜びつつ、そんな様子は表面には出さないように細心の注意を払いながら、私は西田くんとのお話に興じる。

今までそんなに話したことなどなかったのに、昨日から大接近だ。ふとするとにやけそうになる顔の筋肉に適度に力を入れつつ、聞かれたことに答えたり、逆にこっちから質問したり。憧れのひとと話すって、本当にどきどきして、楽しい。時間なんかあっという間に過ぎていく。いつもなら最寄り駅に着くまでにすごく時間がかかる気がするのに、今日は気づいたらもう最寄り駅に着いていた。慌てて降車。

駅から降りて車の通りの少ない道を歩く。道をいくつか曲がったところで、あれ、井上くんの家はこっちじゃないんじゃない？ と首を傾げると、西田くんは笑って、折角だから家まで送っていくよ、と言った。いいよと首を横に振って断ろうとするが、西田くんは笑顔で頑として譲らない。押し問答の末、結局、家まで送ってもらうことになってしまった。

一体誰がこんな展開を予想できたろうか？ まさかの展開にぼうとする頭で適当に相槌をうちながら歩いていると、暫くして西田くんが今思いついたとでもいうように声をあげた。

「そういえば、天野さん、家に男連れ込んでるって本当？」

「……え？」

聞き捨てならない台詞にぱっと振り向くと、井上が言ってたんだ、と西田くんは前を見ながら弁解するように付け足した。

男って……もしかしてもしかしくなくても、晃くんのことだろう。いつ見られたんだろう。全く気づかなかった。しかし男を連れ込んでいるって。言い方次第で私がひどく淫乱な女みたいになるんだなど焦る。まあ事実っちゃあ事実なんだけれども。だが晃くんはそんな対象ではない。慌てて弁明するために口を開いた。

「男って……幼馴染の子だよ。家族ぐるみで仲良くしてる、お隣の子なんだ。中学生だし。そんなんじゃないし。私にとっては弟みたいなもんだよ」

そう言ったところで、気づけば私の家の前に来ていた。そして、気づけば目の前に晃くんがいた。晃くんも制服姿だ。どうやら、丁度帰ってきたところらしい。

「あ、晃くん、」

お、お帰り。うまく笑顔を浮かべられないまま、言った。晃くんは私の方を見もしないで、西田くんを睨みつけている。……初対面のひとを睨みつけるなんてどうかと思う。ちらりと西田くんの様子を窺うと、彼は面白そうな笑みを浮かべて晃くんを見やっていた。これが年長者の余裕ってやつですか。見習わなくては。

ええと。なんとなく気まずくて、おろおろする。一体私はどうすればいいんだ。この変に重たい空気は何だ。ここは、お互いを紹介すべきなんだろうか。困っていると、晃くんが西田くんを睨みつけたまま口を開いた。

「朱里、そいつ、誰」

年上に向かって、しかも初対面でいきなりそいつはないだろう、と思ったが、晃くんの様子に何となく指摘できなくて、素直に紹介した。

「お、同じクラスの西田くん。西田くん、この子、私の幼馴染の晃くん……」

「へえ」

この子が、と西田くんは面白そうに呟いて、晃くんをじろじろと眺めた。眺められている当の本人は、不快そうに眉

間に皺を寄せる。本当に、何、この空気。とてもいづらいんですが。私は何も悪いことなどしていないはずなのに、何故か責められているような気分になってくる。

「あ、西田くん、私の家、ここだから……」

とりあえずこの場の雰囲気はどうにかしたくて、西田くんに声をかけた。晃くんよりはよほど声をかけやすかったのだ。私が声をかけると、西田くんはこっちを向いて頷いて、

「うん、分かった。じゃあまた明日学校で、天野さん」と言い残して爽やかに去っていった。

晃くんは、暫く彼の後ろ姿を睨みつけていたが、不意にポケットから鍵を取り出して、すたすと玄関に向かった。

「あ、晃くん。今日も家、来てね……」

何となく不安になって晃くんの後ろ姿に向かって慌てて言ったが、晃くんは無言だった。この様子からすると、正直来てくれないのではないかと思ったが、鍵を開けて待っていると、ちゃんと必要なもの一式を携えて来てくれた。何も言わずにお兄ちゃんの部屋にさっさと上がって行ってしまったが。それでも内心ほっとしつつ、私は夕飯の支度にとりかかった。

静かな夕飯を終えてお風呂に入って、私は部屋に戻ってベッドに横になった。

夕飯のときも、晃くんは何故だかずっと不機嫌だった。いくら話しかけても無反応で、さっさとご飯を食べるとお兄ちゃんの部屋に戻ってしまった。それを思い出すと、なんだかじわりと目頭が熱くなる。いかんいかん、こんなことで。

眉を顰めて虚空をじっと睨みつける。じっと耐えていると、熱さは徐々に引いていった。が、目はすっかり冴えてしまった。

なかなか寝付けない。そのうち眠気も訪れるかと暫く頑張って目を詰むってみたが、一向に眠りの妖精さんが私のところに訪れる気配はない。

なんだか、喉が渇いてきた。こうなると余計に眠くなくなってくる。

終いには観念して、起き上がった。そろりとベッドから這い出して、暗い部屋のなか慎重に動いてドアを開ける。部屋から出ると、向かいのお兄ちゃんの部屋のドアが少し開いていて、その小さな隙間から青白い光が漏れていた。

不思議に思って隙間から中を覗くと、こちらに丸まった背を向けてパソコンの画面に向かって少年の後ろ姿が見える。カタカタと小さく響くキーボードを叩く音。流石にここからだヘッドフォンから漏れる音楽の音は聴こえないが、今も大音量で好きな音楽を聴いているのだろう。見慣れた後ろ姿。何で電気つけないのかな、と不思議に思った。目、悪くなっちゃう。でも何となく微笑ましい気持ちになる。自然に口元がほころぶ。とりあえず階下に降りて、お茶をとりに行くことにした。

なるべく音をたてないように注意しながらゆっくりゆっくり階段を降りる。まあヘッドフォンで音楽を聴いているのだから、そうそう階段を降りる音くらいで気づくことはないと思うが、念には念のため。そろそろと階段を降りきって、食堂のドアを開ける。ここまで来るともう安心かと電気をつけて、普通に歩く。

冷蔵庫から麦茶の入ったペットボトルを取り出し、二つのグラスに並々と注いだ。ペットボトルを冷蔵庫に戻してお盆にグラスを載せ、階段を注意して上る。途中で気をつかうのもなんだか面倒くさくなって、普通に上がった。お兄ちゃんの部屋のドアを開け、ドア付近にある灯りのスイッチを押す。途端、ぱっと部屋が明るくなる。それに驚いた晃くんが、ヘッドフォンに手をあてがいながらぱっとこちらを振り返った。

「……なに、まだ起きてたの」

ヘッドフォンをずらしながらぶっきらぼうに言う。私はにっこり笑って、晃くんに近づいた。ちゃぶ台にお盆を乗せ、はいとグラスを晃くんの手渡す。晃くんは私の顔と麦茶の入ったグラスを交互に見て、そろそろとグラスを受け取った。

「まだお仕事？」

隣に腰を下ろしてグラスに口をつける。晃くんはこくりと頷いて麦茶を一口飲んだ。相変わらずパソコンの画面には訳の分からない文字や記号の列がずらりと並んでいる。こんなの見てもさっぱりだ。それを素直に言うと、「朱里、確かパソコンのソフトとか作る部活に入ってたよね？」と聞かれた。

「い、一応、ね……」

「じゃあこんなのもちよっとは分かるはずでしょ」

と晃くんの日によく焼けた指がたくさんある文字列のうちの一つを指差す。それをじっと見つめる私。食い入るように見つめてみても、文字が私に語りかけてくるはずもなく。数秒見つめて、私は降参した。

「さっぱり分かりません」

「……朱里って、馬鹿？」

「いや、晃くんが賢すぎるんでしょ」

私は普通だ。いやむしろクラスでは成績は上位の方だ。決して馬鹿ではないと自分では思っている。晃くんは一瞬こちらに冷ややかな視線を向けたあと、すぐさま画面に視線を戻した。不思議に思って晃くんの横顔を見つめるが、彼は画面を睨みつけるように見つめながらお茶を飲んでいる。今の反応は何だったんだ。そう問いかけようとしたとき、パソコンの横に置いてあるルービックキューブが目に入ってきた。色は全然揃っていないで、ばらばらの状態だ。……そうだ。

「ねえ、晃くん。ルービックキューブ、やってよ」

「なんで」

「いいから。見たいの。やってよ」

「やだ」

お茶をぐいと飲み干すと、晃くんは再びキーボードの上に指を走らせた。画面のなかに文字や記号が増えていく増えていく。これは、私のことを無視するつもりだな。

「ねえ。晃くんってば」

「……」

「やってよ」

「……」

「無視しないで」

「……」

「……晃きゅーん、やってほしいにゃん」

一瞬、キーボードを打つ動きが乱れた。自分でも気持ち悪いと思ったが、これは意外な効果あり？ 喜んだ私は、調子に乗った。

「やってーやってー」

晃くんの腕に絡みつく。途端、びくんと跳ねる華奢な肩。キーボードから離れる指。

「ちょ、やめてよまじ」

妙にうろたえている晃くんが可愛くて、更にぎゅっと晃くんの腕にしがみついた。

「じゃあやってくれる？」

上目遣いを意識してそう問いかけると、晃くんは勢いよく顔をそむけた。……可愛い。何を照れているんだか。私と晃くんの間柄なのに。くすくすと笑いが漏れる。

「ねえ晃きゅーん」

「……っ、分かった、分かったからっ」

その言葉に、わーい、と歓声をあげて晃くんを解放する。解放された晃くんは盛大にため息をつく、ルービックキューブを手を取った。

いつもはぶっくらぼうでそっけないけど、たまにこういう素直なところがあるから晃くんは可愛いんだ。思わずにやけてしまう。

晃くんはちらとこちらに視線を投げて、なににやけてんの、とぶっくらぼうに言いながらルービックキューブを動かした。

かしゃかしゃと音をたてて、面が動いていく。ルービックキューブをやらない私でも、動きに全く無駄がないことぐらい分かる。何度見ても鮮やかな手さばきだ。じっと見つめていると、数秒後には全ての面の色が揃っている。あんなにでたらめだった色たちが、今では綺麗に並んでいる。すっきり。そう、すっきりするのだ。

「これで満足？」

私の掌の上にぼんと綺麗に整ったルービックキューブを乗せる。その鮮やかな立方体をしげしげと眺めながら、私は晃くんに笑いかけた。

「鮮やかな色が揃っているのは、なんだか安心するね」

と、晃くんはじっと私の顔を見つめてきた。無表情だ。思わず笑みをひっこめる。何、私、何か変なこと言ったかな。自分の言葉を思い返しながらかみ返していると、やがて晃くんはふいと私から顔を背けて、

「……僕もそうになりたい」と、ぼそりと呟いた。そうになりたいってどういうことだ？ 意味が分からず当然、どういう意味、と尋ねた。でも晃くんは、もう遅いし寝なよ、とだけ言って作業に戻ってしまった。それ以上は何を言っても無駄だった。

最終的にはヘッドフォンまで装着してしまって、晃くんの世界から締め出された私はすごすご退散するしかなかった。

何となく思い立って、久々に部室に顔を覗かせてみた。カルチャー部。それが私の所属していた部活だ。活動内容は主にパソコン関係。ソフトをいじったり、簡単なソフトを作ったりするのがメインの活動だ。私は三年生でもう部活は引退しているのだが、仲の良い後輩に久々に会いたくなったので、気軽に部室のドアを開けた。しかし、開けるべきではなかったのだ。

「朱里先輩い〜」

「ど、どしたのくーちゃん」

挨拶するなりそれまでパソコンに向かっていた後輩のくーちゃんこと久美子ちゃんに泣きつかれ、突然の事態に私は咄嗟に反応しかねた。くーちゃんはぎゅうぎゅうと私に抱きつき、困ってるんですよとおと必死に訴えてくる。何をそんなに困っているのか。天変地異でも起ったというのか。

「プログラミングが終わらないんですよおー」

締め切り三日後なのに、まだまだあるんですー、とずるずると私をパソコンの前に引きずって行って自分の領域を指し示す。パソコンの周りには、ぼろぼろに使い古されたプログラミングの分厚い本と、CD-ROMが何枚か積み重なっていた。

「お願いします手伝ってくださいー」

「え？ いやいやちょっと待って、」

確かに私はあまり勉強をしてはいないが、これでも一応受験生なんだぞ？ もう部活は引退したんだぞ？ しかも私は幽霊部員だったから、そんなにプログラミングは得意ではないんだぞ？ そう言おうと口を開きかけたが、閉じないわけにはいかなかった。私に抱きついてうるうると大きな目を潤ませながら、必死に懇願する、すっかり困りきった可愛い後輩がそこにはいた。……逃げられなかった。

本当に、気まぐれを起して部室になんか行くんじゃあなかった。

「はあ」

夕飯を食べてお風呂に入った後、ろくに頭を乾かしもせずに私はお兄ちゃんの部屋でノートパソコンを開いた。

晃くんと背中あわせに床に座り込んで、自分のノートパソコンに向かってうんうん唸る。

久しぶりに見たプログラミングの本は、やはり私には難しすぎて何が何だかさっぱり分からない。

後輩の可愛さに負けて、引き受けたりするんじゃなかった。甘やかすのは後輩のためにもよくないと分かっているのに、駄目だな。こんなじゃ将来いいお母さんになどなれやしない。

これで何度目か分からないため息をつく。しかし一旦引き受けてしまったものはちゃんとやらねばならない。とりあえず、一番簡単だというものを引き受けてきたので、これくらい何とかせねば先輩として立つ瀬がないというものもある。

プログラミングの本をぱらぱらと捲りながら、パチパチとキーボードを打つ。途中で詰まる。考える。

……何かが違う。何かがおかしい。

しかしそれが何かは分からない。

うんうん唸りながら本とパソコンの画面を交互に睨みつける。後輩に借りた、このソフトに関して細かく書かれたノートを捲ってみる。最終的にこのソフトをどういう方向に持っていくのか、それは理解できたが、持っていくかたがさっぱり分からない。

……やっぱり私はプログラミングには向いていないんだ。

なんでカルチャー部になんか入ったのだけ？

結局は幽霊部員になってしまったけれど、入るときにはそれなりの理由があったはずなのに。

……は、いけない。プログラミングを進めねば。

……しかし分からない。明日持っていくと約束したのに。この調子だと今日は徹夜か……。

いや、徹夜して終わるのか？

本当に完成させられるのか、自分。

不安だ。とてつもなく不安だ。

悶々と考えながらうんうん唸っていると、後ろで身じろぎする音がした。

「さっきから何唸ってんの」

背中にかかる呆れたような声。

「後輩にプログラミング頼まれちゃったんだけど、さっぱり分からなくて。今日中に完成させて明日持っていかなきゃいけないのに」

本に目を落としたままそう答えると、さっと脇から褐色の肌をした細い腕が伸びてきて、脇に置いてあったノートを拾い上げた。

暫くお互いに無言。私は小難しい本と睨めっこ。

答えなんか載ってやしないって分かってはいるけど、どうしようもないのだ。睨んでいても分からないので、ため息をついて画面に視線を戻した。

うーん。絶対にどこか間違ってるんだけどなあ……。どこがおかしいんだろう。眉を顰めながら間違い探しをしていると、すぐ後ろに気配を感じた。そして両脇からにゅっと伸びてくる腕。どんどん画面がスクロールしていく。

「あ、ここ間違ってるじゃん」

予想以上にすぐ耳元で声が出た。吐息が耳にかかるくらい、近くだった。そのことにびっくりして、思わず固まる。

晃くんは別に気にした風もなく、目をつけたところにポイントを置いて、間違っている部分を消して、新しく文字を打ち直す。そしてまたスクロールして、私が書いていたところまで戻って、カタカタと新しく文字列を打っていく。

慌てて邪魔にならないようにどここうとしたが、無理だった。

腕は両脇から伸びている。

つまり？ これはどういうこと？ どういう体勢？

導き出された答え：私は、今、晃くん後ろから挟まれるような体勢で座っている。

……。

そう気づいた途端、何故か高鳴る心臓の音。なんか身体が、やけに熱い。特に顔が。え、ちょっと待って。これどういうこと？ どういうこと？ 頭がすっかり混乱してフリーズしちゃって、うまく考えられない。

「終わったよ」

その言葉にはっとして画面に意識を戻すと、確かにプログラミングは完成していた。この短時間で、見事に。流石は天才少年晃くん。

お礼。そうだ、お礼言わないと。

そう思って慌てて振り返ると、ぼちりと至近距離で目が合った。

かつてないほど近くに、晃くんの顔があった。驚いているのが私だけだったら、笑って済ませられたのだろうが、晃くんのほうも驚いていた。お互いに固まる。暫し見詰め合う。時が、止まったような気がした。

先に顔を逸らせたのは、晃くんだった。

「お、終わったからっ。もう、寝れば」

長い前髪から覗く褐色の肌が、赤い。何故だかそれを見ると、こっちまで顔に熱が集中してしまう。私は慌ててこくこくと頷いて、データを保存してパソコンの電源を切った。ノートパソコンを折りたたんで小脇に挟み、CD-ROMを拾い上げてぱっと立ち上がる。

「ありがとうっ！ お、おやすみっ」

ぱたぱたと慌しく部屋を後にした。自分の部屋に戻ってぱたんとドアを閉める。ドアに背中をつけて、ずるずると床にへたりこんだ。

ノートパソコンをぎゅっと抱きしめる。そこで本をお兄ちゃんの部屋に忘れてきたことに気づいたけど、今取りに行くのはちょっと無理だと思ったし、別に本は急いで取りに行く必要もないので、もういいやと思って寝るためによろよると立ち上がった。

朝から天気が悪かった。

雨はざあざあと降っていて、昼なのに電気をつけないといけないくらい、暗かった。

朝後輩のくーちゃんと駅前のコンビニで待ち合わせてCD-ROMを届けた後、特に予定もなかったので、この日も私は晃くんとお兄ちゃんの部屋で寛いでいた。

勉強しないでいいの、受験生、なんて言われたけど、気にしない。

この一週間は受験生をお休みすることに決めてるんです。

そう言うと、何それ、と呆れ顔で言われた。

よかった。いつも通りのやりとりだ。

昨夜はちょっとおかしかったけれど、たまたまだよね。と内心ほっとしながらも私は晃くんの横で寝そべりながら漫画を読んでいた。晃くんは相変わらずパソコンに向かって仕事をしている。

大変だねえ、仕事。と言うと、別に、とそっけない返事が返ってくる。

嫌じゃないの、と尋ねると、嫌いじゃないから、と画面から目を逸らさずに答える。

漫画を読むのにも飽きたので、ごろんと身体を回転させて晃くんに顔を向けた。

じっとその横顔を見つめる。改めて見ると、睫毛長いなあ、うらやましいぞ、なんて思う。全体的に細かいし、ちゃんと食べてるのかな。いや、家で一緒にご飯食べるときはたくさん食べていたけれども。もしかして、胃下垂かなんかじゃないか。お姉さん心配だよ。なんて思いながらじっと見つめていると、不意に晃くんががしがしと頭をかいてこっちを振り向いて、

「さっきから、なに」と顔を赤くして苛立った様に尋ねてきた。照れてる。可愛い。

「いや、お姉さん、晃くんのこと心配だなあとと思って」素直にそう答えると、

「何それ意味わかんない。てか、年上ぶるのやめてくれる？ 朱里のくせに」なんて態度とは裏腹に可愛げのないことをおっしゃってくれる。

「私の方が年上なんだから、年上ぶって何が悪いのさ」

「精神年齢は僕の方がずっと上だよ」

「そんなことは、」

「あるね」

平然と言い放つ晃くん。……お姉さん、なんだかちょっと悲しいな。何も言い返せないのが余計に悲しい。はあと思わずため息が漏れる。と、その時。

「ほうあつ」

床に転がしておいた携帯が突然ブブブと震えた。そういえばマナーモードにしていたんだった。……びっくりした。

「びっくりしすぎでしょ」

「だってびっくりしたんだもん」

いいでしょ、別にと口を尖らせながら誰からのメールか確認するため携帯を開く。受信画面を見ると、差出人は西田くんだった。何だろう。首を傾げながらメールを開く。

今、電話してもいい？

文面にはその一言だけがあった。

電話？ 何の用事だろう。よく分からないけど、鼓動が早くなった気がした。

ちらりと晃くんを窺うと、再びパソコンの画面に視線を戻している。

よっと立ち上がりながら返信を打つ。い、い、よ、と。送信。何も言わずに廊下に出て、階段を降りる。降りている途中で、手のなかで携帯が震えた。電話だ。早いな、と内心驚きながらもボタンを押して電話に出る。

「……もしもし？」

『もしもし？ 天野さん？』

「うん」

ドアを開けて、リビングに入る。暗かったけど、どうせ電話だし、すぐにまた二階に戻るしと思って電気はつけなかった。お気に入りの二人がけのソファに腰を下ろす。

あれ、私何でわざわざリビングに降りてきたのかな、と今更ながらに思ったけど、何となく西田くんとの会話を晃くんに聞かれたくなかったんだとすぐに気づいた。

『ごめんね、急に』

「いやいや、いいよー。……でもどうしたの？」

『ああ……ちょっと、どうしても言いたいことがあって』

どうしても言いたいこと？ 西田くんが私に、何を言うというのだろう。

この間までそんなに会話したこともなかったというのに、本当についこの間から急に大接近だな、私。と内心嬉しく思いながら、言いたいことって何？ と相手の言葉の続きを待つ。

沈黙が降りた。

外で雨の降る音だけが耳につく。数秒待ってみたものの、西田くんが何かを言い出す気配はしない。何を躊躇っているのだろう。用事があるなら、気軽に言ってくればいいのに、と思いながらも、どこかで、まさか、これはと知っている自分がいた。

いやいやまさか。西田くんがそんな、あまり接点のない自分に、まさかと自分を戒める。でも鼓動がやけにうるさい。ええい落ち着け自分。調子に乗るなど心のなかで叱りつける。あまり期待するんじゃないよと言い聞かせて、西田くんが言葉を発するのを待った。しかし相手は無言。

「……あの、西田くん……？」

『あ、待って。ごめん、切らないで』

いや、切らないけどとぼそぼそと言うと、ごめんともう一度謝られた。何で私、謝られているの？ 首を傾げる。

『……単刀直入に言います』

「は、はい」

西田くんの口調が急に改まったものになったので、私も思わず姿勢を正した。

『好きです。付き合ってください』

一瞬、思考が停止する。

好キデス。付き合ッテクダサイ……？

え、聞き間違いじゃない？ 聞き間違いじゃない？

「えっ……え？」

嘘何これ夢じゃないの？ 本当に現実？ 頬をつねってみる。……痛い。夢じゃない。ってことは、だ。

私、西田くんに、告白……された？

告白されたのなんて初めての経験だ。こういうとき、何て言ったらいいのか、どうしたらいいのかさっぱり分からない。プログラミング以上に私には向いていないのかもしれない。突然のことに返事を思いつかず、うろたえていると、

『返事は、今じゃなくていいから。その……じっくり考えて』

と西田くんの声が聞こえて、それじゃという声と共にぶつりと電話が切れた。

「えっ……ちよ、」

言い逃げ？ いやでも返事は待ってるみたいな言い方だったし。一応言い逃げではないのか。携帯電話を見る。携帯を握った手を膝の上に下ろして、呆然と宙を見つめる。

雨が降る音が、ひっきりなしに鼓膜を叩いていた。

どれくらいそうしてぼんやりしていたのだろう。

ふとドアが開く音がして、ゆるゆるとドアの方に顔を向けると、晃くんが怪訝そうな顔をしてこちらを見ていた。

「朱里？ 暗いところで何やってんの」

電気をつけようとスイッチに手を伸ばしかけたが、私の様子がおかしいのに気がついたのだろう、すぐに手を下ろして、こっちに近づいてきた。私の前に立って腰に片手をあてて、私を見下ろす。

「どうしたの。さっきの電話、誰から」

電話……。西田くん。そっか。私、

「……どうしよう、晃くん……」

「は？」

顔が見る見るうちに赤く火照っていくのが自分でも分かる。でも抑えられない。

携帯をそっと脇に置いて、自分の熱い頬を両手で押さえた。晃くんが無言で見ているけど、それどころじゃない。

「私……私、告白、されちゃった……」

「……」

そうか。私、西田くんに、告白されたんだ。自分で口にして、やっと正真正銘の現実の出来事として受け止められた。

「わああ、えっと、どうしよう」

「……」

頬から外した両手で意味なく握りこぶしを作ってみる。本当に意味はない。でもせずにはいられない。

「返事って、できるだけ早くしたほうがいいよね」

「……朱里、」

「えっと、直接言うのは照れるから……メールじゃ、駄目かなあ？」

「朱里」

なあに？ と尋ねようとしたときだった。

徐に近づいてきた晃くんにぐいと押され、突然のことに驚く暇もなくバランスを崩す。

視界が反転。

気づけばすぐ目の前に晃くんの顔があって、吐息がかかるくらいすぐそばに晃くんを感じて――唇に柔らかい感触を感じた。

薄く開いていた口から何かが入ってきて、舌に触れる。

まるで金縛りにあったかのように身体は痺れ、全く動かない。

え、これって？

これ、どういうこと？

何が起きてるの？

身体をついでに頭も痺れてるのか、うまくものを考えられない。

その間も口のなかで何か動いており、息が苦しい。必死に酸素を求め、晃くんが離れた瞬間に思い切り息を吸い込んだ。

「あ、晃、くん」

涙目で名前を呼ぶと、はっとしたように晃くんが動きを止めた。

暗い部屋のなかで、お互いに無言で見つめあう。暗くても、見る見るうちに晃くんの褐色の肌が赤く染まっていくのが分かった。

一瞬、顔を私から背けようとする素振りを見せる。でも、彼は背けなかった。赤い顔のまま私を見下ろして、「……好きだ。僕は、朱里が好きだ」とだけ言って、私の上からそっと離れた。

そして何も言えずに固まっている私の髪をそっと一撫でしてから、さっとその場から立ち去って、リビングを出ていった。続いて階段を駆け上がっていく音、二階でドアがぱたんと閉まる音がする。

私はよろよろと上半身を起して、ソファに座り直した。いつの間にか衣服が少し乱れていたけれど、そんなこと気にならないくらい私は気が動転していた。

晃くんの真剣な眼差しが、妙に強く印象に残っていた。

雨はもう止んでいた。

窓から外を覗くと、どんよりとした曇り空が視界に入った。重たそうな灰色の雲が空一面を覆っているのを見て、ため息がひとつ零れた。

結局一睡もできなかった。

これは、何よりも睡眠欲が一番強い私にしては珍しいことだ。それもこれもみんな、晃くんのせい。晃くんが、昨日、あ、あんなことをするから……。

ぶんぶん頭を勢いよく振って、昨日のことを頭から追い出そうとする。

パジャマ姿のままベッドに腰かけて、床に転がっていた大きなキリンのぬいぐるみをぎゅうと抱きしめる。

抱きしめすぎて首が折れてしまったそのキリンのぬいぐるみの大きな頭に顎を乗せて、ぴっちり閉まったドアを覗みつける。

向かいのお兄ちゃんの部屋。出ていった気配はないから、今も晃くんはお兄ちゃんの部屋にいるのだろう。今、何をしているのだろうか。相変わらずパソコンに向かっているのか、それとも眠っているのか。

枕元に置いてある目覚まし時計をちらりと確認した。八時過ぎ。

もう、起きているだろうか。電話してもいいかな。

立ち上がってぬいぐるみをそっと床に降ろすと、机の上に置いてあった携帯電話を取り上げた。

ぶらんと狐のストラップが揺れたのを見て、そういえば晃くんは結局、ストラップをつけてくれたのかな、なんて思う。……駄目だ。今は晃くんのことを思い出すだけで顔が熱くなる。

一人で慌ててアドレス帳を検索し、目当ての電話番号を見つけるとすぐさまかけた。携帯を耳にあてがい、呼び出し音を静かに聞く。出てくれることを祈りながら待っていると、十二回目の呼び出し音の後で、はい、と眠そうな声が聞こえてきた。

「あ、もしもし。お兄ちゃん？」

『朱里？』

こんな時間にどうしたの、と聞きなれた優しい声。どこか眠そうなその声からすると、きっと今の今まで寝ていたのだろう。日曜日だから無理もない。

私の電話で起してしまったようだが、お兄ちゃんは文句ひとつ言わずに私に優しい言葉をかけてくれる。いつだってそう。お兄ちゃんは私に優しい。だからつつい甘えてしまうのだけれど、どうか許してね。

「お兄ちゃん、美人な彼女できたって言ってたよね」

『え、何急に』

彼女の話話を振ると、お兄ちゃんの声が急に慌て出した。相変わらずうぶだなあ。こんなんじゃ彼女さんも苦労するのではないかと思ったが、今は関係ないことなのでそのことには触れないことにする。

「好きって、何」

『……え？』

唐突な質問に、僅かな沈黙が降りる。私は再びベッドに腰を下ろして、お兄ちゃんのを待った。待っている間特にすることもないので、床に横たわっているキリンのぬいぐるみをつま先でいじる。おなかを蹴ると、戸惑ったような大きな黒い瞳がこちらを向いた。

『朱里、好きなひとでもできたの？』

「……分かんない」

ぬいぐるみを弄ぶのをやめて、足をあげて膝をかかえた。三角にたてた膝の上に顎を寄せ、俯く。

分からなかった。自分で自分のことが、分からなかった。

一晩中考えてみたけれど、それでも分からなかったのだ。だから、どうしようもなくなって、お兄ちゃんに電話した。お兄ちゃんなら、私に答えを教えるような気がして。甘えだって分かっている。

自分でどうにかしないとイケない問題だってことも。でも、でもどうしようもなかったのだ。電話せずにはいられ

なかったのだ。このまま一人で考え続けたら、延々と同じところをぐるぐると回り続けるような気がして、怖かったのだ。

『何があったのか、話してごらん』

そんな私の心情を察してくれたのだろうか、お兄ちゃんは優しく私に声をかけてくれた。お兄ちゃんの温かい言葉は、私の弱りきった心をそっと包んでくれる。じわりと目頭が熱くなったけれど、歯をくいしばって耐えた。

私は昨日の出来事を簡単に説明した。もちろん、その、晃くんにされたことは言わないでおく。こればかりはいくら大好きなお兄ちゃん相手でも言えない。口にすることで昨日のことがまざまざと思い出されるのも恥ずかしいというものもある。

しかしその状況を抜かして晃くんに告白されたというのもちよっと無理があるので、とりあえず晃くんが怒ったということにする。

私の短い説明を、口を挟まずに聞いて、お兄ちゃんはなるほど、と言った。

『朱里は、今、誰のことを考えてる？』

……考えているっていうか。考えないようにしているっていうか。答えられずにいると、電話の向こうでお兄ちゃんが優しく微笑んだ気がした。

『僕にも好きってよく分からないけれど。でもね、好きなひとのことって、気づいたら考えてしまっているもんだよ。好きなひとには自分の傍にいてほしいと思ってしまったり、幸せになってほしいと思う。嫉妬とかしてしまうこともあるし、苦しくなることだってある。朱里は、このひとに彼女ができれば嫌だって思うひと、いる？』

うーん、と唸りながら考えてみた。ぱっと思いついたのはもちろん、晃くんと西田くん。彼女ができれば。……二人に彼女ができれば、複雑、だな。なんて思ってしまっただけからはっとする。ということは私、二人共好きってこと？ え、それって一番駄目なパターンじゃない？ そう思ってショックを受けていたとき、

『あ、憧れのひととかは別だからね』とお兄ちゃんが釘をさすように付け加える。そう言われるとますます分からなくなっ、て、混乱する。一体どういうことなんだ。

「分からないよ」

素直に降参すると、笑い声がした。

『こればかりは僕にもどうしてあげることができないよ。自分で考えな』

「えー、お兄ちゃーん」

『じゃあ、僕これからちょっと用事あるから、またね』

「お兄ちゃ」

ぶつりと電話が切れた。一瞬、かけ直そうかとも思ったが、流石にやめておいた。確かに、これは自分でなんとかしてはいけない問題だ。誰かに頼ればいってもしゃない。私は閉じた携帯をベッドの上に放り投げて、後ろ向きにベッドに倒れこんだ。

じっと天井を見つめる。答えがそこにあるとでもいうかのように、睨みつける。

西田くんは、同じクラスのひとで、私の憧れのひとで。格好よくて明るくて、誰とでも仲よくできて頭もよくて。…とにかく素敵なひとだ。

晃くんはといえば、私の幼馴染でお隣の男の子で、四つ年下で。

私にとっては弟みたいな存在で、気づけばいつも隣にいた。

昔は朱里ねえちゃんっていつて私の後ろをくっついていたのに、今ではすごくそっけなくてぶっきらぼうで。

中学生の分際でその天才的な頭脳をいかしてゲーム開発の仕事なんかしているし、ルービックキューブの才能もあって大会にも出場したことがある。

パソコンばかりしているくせに何でもか日によく焼けているし、スポーツもできるほうだし。

一見冷静で大人びて見えるけれど、中身はやっぱりまだまだ子どもでそんなところに安心したり。昔はいじめられっこだったのに、今ではそんな様子は見受けられないし。

まあ随分と格好よくなっちゃって、さぞかし人気があることだろう。

……学校では、どんな感じなのかな。

女の子の友だちとかいるんだろうか。

いや、いてもおかしくはないし、いないほうが問題があるような気もしなくもないけれど。でも、それを思うと少し複雑だ。

朱里ってば、隣の男の子のこと話すとき、いつも楽しそうだね。

いつだったか、友だちにそう言われたことがある。

その子のこと、本当は好きなんじゃないの、なんてからかわれて。そのときはそんなことないと否定したけれど、今思えば友だちの指摘は正しかったのかもしれない。

晃くんは、本当に、私にとってはずっと弟みたいな存在だった。

それが、いつからだろう、彼の存在が自分のなかですごく大きくなっていった。

晃くんと出会ってから、自分の人生が色鮮やかになった気がするの、決して気のせいではないと思う。晃くんは、私の人生に色をつけてくれたんだ。

そこまで考えて、まるでばらばらだったルービックキューブの面がかちりと揃ったような、そんなすっきりした感覚を覚えた。

そうか。そうだったんだ。何だ、思っていたよりもずっとずっと簡単なことだったんじゃない。

反動をつけて起き上がった。その場でうーんと大きく伸びをする。窓から外を見ると、雲間から一筋の光が差し込んでいるのが見えた気がした。

自分の部屋を出て、向かいの部屋のドアをノックもなしにそっと開ける。隙間から中を覗くと、すっかり見慣れた、丸まった背中が見えた。パソコンを脇に置いて、ちゃぶ台に突っ伏している。パソコンの画面は煌々と輝いていて、どうやら作業中に眠ってしまったようだ。

静かにドアを開いて中に滑り込む。閉める音で起してしまうのも何なので、開ければなしで放置しておくことにした。そろそろと近づいて寝顔を覗きこむ。

規則正しい寝息が聞こえてくる。ヘッドフォンは外して首にかけていた。寝苦しくないのかな、なんて思う。……それにしても、改めて見ると……。

「やっぱり睫毛長いなあ」

本当にずるいと思う。男の子って、そんなに長くなくていいんじゃないか。分けてほしい。

「ていうか、腕も細っ。女の子みたい」

中学生の男の子ってこんなものなのだろうか。いや、そういう訳ではないと思う。きっと晃くんが特別なんだ。よく見れば首も細い。

「……うなじがエロい」

ぱっと見女の子に見えなくもない。というか、知らないひとだと晃くんを女の子と間違えることもあると思う。私は小さい頃からずっと一緒だから、流石に間違えないけれど。

真っ黒な髪の毛もさらさらだ。長い前髪が顔にかかっている、かきあげたくなる。……見た目があんなにさらさらし

ているんだから、触ると気持ち良さそう。触っても、いいかな。触りたい。

「……い、いいよね。寝てるし。……減るもんじゃないし」

と誰に確かめるといってもなく自分に言い聞かせ、頷いて恐る恐る右手を伸ばす。何だか変に緊張する。昨日のことがあるからか。今までだったら、普通に抱きついたりもしていたのに。

もう以前みたいな関係には戻れないんだなあと少し寂しく思いながら、手をゆっくりゆっくり伸ばしていると、あと少しで触れるというところで晃くんの両目が何の前触れもなくぱちりと開いた。一瞬反応が遅れる私。

慌てて伸ばしていた手をひっこめようとする。が、晃くんのほうが反応が早く、ぱっと掴まれてしまった。うろたえる私。

「何が減るもんじゃないって？」

私の手を掴んだまま身体を起し、空いている方の腕はちゃぶ台に肘をついて、その手に顎を乗せて余裕の態度。

「お、起きてたの……？」

冷や汗をかきながら後ずさろうとする。が、手を掴まれているため思うようにいかない。晃くんの黒い瞳がじっと私を見上げてくる。へらりと力なく笑みを浮かべるが、何にもならない。

「いつから起きてたの？」

「やっぱり睫毛長いなあ、って朱里が呟くところから」

それって最初からってことじゃん。ということは、私の独り言は全部聞かれていたって訳だ。今更ながら恥ずかしくなってきた。何だかいきなり追い詰められているような気がするのはいかぬのせいかな？

「うなじがエロいってどういうこと」

「……すみません……」

「すみませんじゃ分からないよ。ちゃんと説明して」

説明しろって、そのままの意味なんです。しかしそれを素直に言うほど私も馬鹿じゃない。結局何も言えずにいると、朱里、と名前を呼ばれた。そろそろと顔を上げて晃くんを見る。真剣な表情が、そこにあった。

「返事、でしょ」

「……」

「昨日の返事、言いに来たんじゃないの」

何で分かったの。目を見開くと、晃くんは小さく苦笑した。

「何年幼馴染やっているとってんの。それに……好きな相手のことならなおさら分かるよ」

座って、と言われたので素直に従った。床に座りこんで俯き加減になる。手はまだ解放してくれない。それが何だか気恥ずかしい。

「で？」

ちらと相手の様子を窺うと、相変わらずこちらを見つめてくる真剣な瞳と視線がぶつかった。見つめ返すほどの度胸が残念ながら私にはなくて、慌てて視線を逸らす。心臓がうるさいほど大きな音をたてている。ええい、ちょっとは静まれい、と内心の動揺を少しでも鎮めるために心のなかで叱咤してみる。しかし効果は当然ない。

頑張れ自分。女は度胸だ。こういうときにふんばらなくて、いつふんばるといふのだ。そう言い聞かせてはみるけれど、だらだらと冷や汗が流れるばかりで口が開かない。……駄目だ、こんなじゃ、駄目だ。

「朱里、」

私が内心で葛藤していると、不意に少し切なそうな響きを帯びた晃くんの声が耳に入ってきた。

不思議に思って顔を上げると、声と同じように切なそうな表情を浮かべた晃くんがそこにいた。え、何でそんな顔しているの。訳が分からず戸惑う私。そんな私をよそに、晃くんは言葉を吐いた。

「僕に気、使わないでいいから。返事くらい素直にすればいいじゃん。」

そう言ってじっと懇願するように見つめてくる晃くん。

……ちょっと待って。何か、晃くん悪い方に考えてる？

これは、早く言わないとまずいかも。私は慌てた。

思わず膝立ちになって、私の手を掴んでいる晃くんの手をぎゅっと握る。

「わ、私も晃くんが好きだよ！」

言ってから、かーっと顔が赤くなるのが自分でも分かった。膝立ちになったまま、晃くんをじっと見つめる。

顔を背けたいけれど頑張って思い留まる。晃くんは、最初は驚いたように目を見開いて私を見上げていたけれど、徐々にその端正な顔に笑みが広がっていった。

「朱里」

「は、はい」

徐に私と同じように膝立ちになって、晃くんが顔を近づけてきた。軽く唇に触れる感触。顔を離すと、晃くんは不敵に笑った。

「僕のこと女子みたいって言ったの、許さないから。覚悟しておいてよね」

すっかりのぼせた頭で晃くんの言葉に思わず頷きかけて、はっとする。

抗議の声を上げたけれど、晃くんは笑ってとりあってくれなかった。照れて思わず顔を背ける。

と、晃くんのズボンのポケットから覗く黒い携帯が視界に入った。携帯からは、可愛い狐がぶら下がっている。それを見て突然、自分が何でカルチャー部に入部したのかを思い出した。

晃くんがプログラミングなんかやっていたからだ。

晃くんが面白そうにやっていることを、自分もやってみたいと思ったのだった。

なんだ。今思えば、私ったら昔から晃くんのこと大好きだったんじゃない。気づいてみれば、本当に簡単なことだったのだ。

とにかくにも。

この日から、私たちは彼氏彼女になりました。

FIN